

2025年8月10日 第二礼拝

説教題「『小さな種火』を」ヨハネ福音書19章31～37節

主任牧師 加藤 誠

「しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水が流れ出た。」(ヨハネ福音書 19:34)

先週は80年目の広島と長崎の原爆の日があり、それぞれ平和を思い巡らす時を過ごされたことと思います。平均年齢が86才を超えたという被爆者の方々ははっきりとこう証言しています。「原爆は、人間として生きること、死ぬことも否定する」と。人間は原爆とは共存できないのです。にも関わらず今世界では、原爆を持つことを正当化し、さらには原爆の使用も正当化する言葉が堂々と語られるようになってきています。わたし自身は今年、被爆者の方たちの証言と祈りを自分の言葉にして受け継いでいく責任というものを改めて強く示された思いがしました。

「過去に目を閉ざす者は、将来にも目を閉ざす」。これは聖書の基本的な考えです。なぜ聖書がこんなに分厚いのか。神に造られた時から、人間は神を悲しませるような過ちを繰り返してきた罪の分厚さであり、同時に、そのような罪に沈む私たちをあきらめなく祈りを注ぎ続ける神の愛の分厚さです。聖書では、過ちを見つめること、罪を悔い改めることは、みじめで恥ずかしいことではありません。罪ある者をそれでも忍耐し祈り続けてくださっている神の愛に気づかされ、神の国の希望に心と体の向きをしっかりと定めて新しい一步を踏み出していく恵みの時なのです。

さて、今日の週報の巻頭言には、80年前の戦争で「おとり兵」として戦争に駆り出された経験を持つ、聖公会の元司祭である小貫雅夫先生の言葉を紹介させていただきました。その中で小貫先生が「平和はつくり出すもの」、何もしないでは平和は実現しないこと。「小さな種火を持ち続けること／燃やし続けること」の大切さを語っておられました。この「小さな種火を持ち続ける」とは具体的にはどういうことなのか。そのことを今朝は聖書に聴いていきたいと思っています。

今朝ご一緒に開いたのは、十字架上で息を引き取られた主イエスの遺体を取り下ろしている場面です。正直なところ、これまではあまり注意を向けることなく読み流してしまった箇所ですが、最近『トイレのピエタ』という映画を観ました。「ピエタ」とは十字架から取り下ろされた主イエスの遺体を母マリアが抱きかかえている構図のことで、ミケランジェロのピエタをご存じの方は多いかもしれません。その映画を観てから、十字架ですべてを成し遂げられた主イエスの遺体に込められているメッセージを思いめぐらすことがあり、今回この箇所を選ばせていただきました。

この場面を少し説明しますと、十字架刑はローマの非常に残酷な死刑方法でした。死刑囚の両足と両手をくぎ付けにし、苦しみを味わい尽くさせるために、普通は何日

も野ざらしにしておくものだったようです。けれどもユダヤの律法では、木にかけられた遺体は呪われたものであり、その日のうちに取り下ろすべきものと考えられており、しかもこの時は翌日が過越の祭という特別な安息日でしたので、その安息日を汚さないためにも、ユダヤの人たちはどうしてもその日のうちに死刑囚たちの遺体を十字架から取り下ろさせてほしいとピラトに願い出たのでした。そこで兵士たちは受刑者の足を折るように命じられます。足を折ると、十字架刑に処された者の全体重が両手にかかり、胸が圧迫されて窒息し死期が早まるのだそうです。主イエスの両側の囚人たちは足を折られて死期を早められましたが、主イエスはすでに息を引き取っておられたので足を折られることはありませんでした。念のため兵士が槍で胸を刺しますと血と水とが流れ出たのでした（35節）。福音書の記者は、そこに聖書のみ言葉の成就を見ます。「その骨は一つも砕かれない」（詩編 34：21）というのは、人々の罪をすべて引き受けられた贖いの小羊である主イエスのこと、また「彼らは自分たちの突き刺した者を見る」（ゼカリヤ 12：10）は新しい救いをもたらす者としての主イエスが指し示めされていると受け取ったのでした。そして特に主イエスの遺体から血と水が流れ出たことに注目します。ヨハネ福音書で、血は十字架の贖いの救いを意味し、水は十字架の主を通して私たちに与えられる聖霊を意味します。つまりヨハネ福音書の記者は、十字架ですべてを成し遂げられた主イエスの遺体から流れ出た血と水、それは十字架の主による救いと新しい命の始まりとして受け取ったのです。

多くのユダヤ人にとって、イエスの遺体は、すでに意味を失った、無力で、汚らわしく、早く片づけてしまいたい「物」にすぎませんでした。福音書記者ヨハネは、十字架で息絶えた主イエスの遺体こそ、十字架で神のみ旨を成し遂げた「しるし」であり、罪の救いと新しい世界の始まりを告げる「しるし」として受けたのです。

このことを考えるとき、小貫先生の「小さな種火を持ち続ける」とは、主イエスの十字架から「血と水を受け取り続ける」ことではないかと思いました。わたし自身を見つめるとき、「平和をつくりだす」ことの大切さは理解しながらも「平和を壊してしまう罪」をたくさん抱えている自分を示されます。このわたしの罪が贖われ、清められない限り、わたしが平和をつくりだすことは不可能です。主イエスの十字架の赦しと清めがわたしには必要なのです。同時に主イエスは「わたしを信じる者は…その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」（7：38）と語られ、その生きた水とは「聖霊」であるとヨハネは語っています（7：39）。私たち自身は小さく、さまざまな欠けを持っていますが、十字架の主イエスにつなげられる時、聖霊という水の注ぎを通して、主イエスの働きを担う「新しい人」にされていくのです。十字架の血と水は、自らの罪を見つめる者に対する救いと、平和に向かう新しい歩みの始まりです。この「小さな種火」を受け続け、燃やし続けながら平和を祈っていきましょう。